満洲文化史研究会 第 4 回研究集会

日　時	2026 年 6 月 13 日（土）　14:30～17:30
場　所	東洋大学白山キャンパス 6 号館 2 階　6217 教室

- 14:30　あいさつ・自己紹介

- 14:45【報告 1】　**協和会女性使節と「国家の顔」としての女性像**
  ――1932 年の新聞報道にみる「ミス満洲」
  楊　磊（ヨウ　ライ）　東京都立大学・客員研究員

  15:45　休憩

- 16:00【報告 2】　**「満洲国」末期における日中文学者の「交流」**
  ――満洲藝文聯盟から満洲藝文協会へ
  高　静（コウ　セイ）　東京都立大学・客員研究員

- 17:00　研究会・研究活動に関する意見・情報交換

- 17:30　閉会・懇親会

・各報告 30 分、質疑応答 30 分
・司会・運営：羽田朝子（東洋大学・教授）、劉文悦（東京都立大学・博士課程）
・会議資料・会議記録は参加者のみに配布します
・原則、現地対面開催ですが、オンライン参加希望の場合はご連絡ください。
・問合せ：満洲文化史研究会事務局　牛耕耘（東京都立大学・助教）gyuukouun@tmu.ac.jp
参加申込：　https://forms.gle/yz6QzYb5eZnEhBHR6
研究会 HP：　https://manchurian-cultural-history-research-laboratory.com/

【報告要旨】

【報告 1】　協和会女性使節と「国家の顔」としての女性像
――1932 年の新聞報道にみる「ミス満洲」　（楊 磊）

1932 年、「満洲国」の建国とともに、「五族協和」や「王道主義」といった理念は、新聞・雑誌・写真などを通じて広く発信された。なかでも、協和会によって日本へ派遣された女性使節は、「満洲国」を代表する女性として報道され、一部の新聞では「ミス満洲」とも呼ばれていた。本発表では、新聞報道、歓迎会記事、写真、寄稿文などを分析対象とし、建国初期「満洲国」において、協和会女性使節がいかに「国家の顔」として示されていたのかを検討する。とくに、「ミス満洲」という呼称や婦人団体との交流、女性使節自身による講演・寄稿に注目し、「親善」「協和」「婦徳」といった価値観がどのように語られていたのかを考察したい。

【報告 2】　「満洲国」末期における日中文学者の「交流」
――満洲藝文聯盟から満洲藝文協会へ　（高 静）

1941 年 8 月に成立した満洲藝文聯盟とその傘下の満洲文藝家協会は、「満洲国」における藝文統制組織として、日中文学者の接触と協働の場を形成していた。しかし、戦局の悪化に伴う決戦体制の強化のなかで、両組織は 1944 年 11 月に解散され、新たに社団法人満洲藝文協会が設立された。本報告では、従来ほとんど検討されてこなかった 1944 年以降の文芸組織再編に注目し、満洲藝文聯盟から満洲藝文協会への移行過程を整理したうえで、戦時下における日中文学者の「交流」の実態について考察する。とくに、言論統制や戦争動員が強まるなか、中国人文学者がどのように対応し、日本人文学者といかなる関係を形成していたのかを検討し、「満洲国」末期における文化接触の一側面を明らかにしたい。